

V. 2. 新任教員のプロフィール〈自己紹介〉

(1) 言語文化専攻

言語文化教育論講座 講師

西出 佳詩子

2020年4月に言語文化専攻言語教育論講座に着任しました。専門はドイツ語学、ドイツ語教育です。着任から早くも1年が過ぎ去ろうというタイミングで本紹介文を書いておりますが、着任早々、浮き輪無しで荒波の中を必死に息継ぎしながら泳ぐような日々が続きました。COVID-19による影響でメディア授業へ転換したことにともない、先生方や特に学生の皆さんと直接顔を合わせる機会の無いまま初年度を終えることになってしまったからです。実は、着任直前まで勤めていた東京都内の高等学校の最後の授業も一斉休校措置により飛んでしまい、非常に残念な思いでした。来年度こそは事態が少しでも改善に向かい、平穏無事な世が戻ってくるよう願うばかりです。一方で、人生初のオンライン授業実施によりICT教育の魅力や活用法を数多く発見することができました。

私の生まれは東京ですが、幼少期は京都府で過ごしました。洛西の山々(ポンポン山など)を車窓から見ると、両親との登山時に頂上付近で昼食のおにぎりをコロコロとうっかり落としてしまったことを思い出し、とても懐かしい気持ちになります。阪神淡路大震災を経験後、関東圏へ引越したため、約20年ぶりの関西圏生活を楽しまたいと思っています。

さて、私とドイツ語の最初の出会いは高校2年生の時です。当時、英語以外の外国語を学習できる高校はそれほど多くありませんでしたが、幼少期に父がドイツに単身赴任していたことから何となくドイツに興味を沸き、選択必修科目としてドイツ語を履修しました。当時の学習経験はのちに高校や大学のドイツ語教員を目指す要因にもなりました。

出身校の中央大学の独文学専攻では特にドイツ語の形態論、テキスト言語学を、大学院ではドイツ語テキストの読みに興味を持ち、博士論文では日本語を母語とするドイツ語学習者とドイツ語母語話者の読みの諸相について要約課題や重要度判定課題をもとに論じました。読みという行為は産出、受容という観点では、受容に相当しますが、能動的で動的な行為です。読み手はテキスト内容を既有知識を参照あるいは結合、時には修正しながら理解し受容します。またテキストの展開を推測する場合があります。こうした読み手のテキストへの積極的なかわりは外からは直接見ることのできない言語処理であり、外国語教育における科学的な基礎データとして重視かつ充実していく必要があると思います。また最近では、博論であつかった研究調査をとおして、ドイツにおける国語教育(特に文章理解に関わる指導、学習)についてもリサーチし、日本の国語教育と比較、考察していきたいと考えています。

既に多くの先生方、職員の皆様にお世話になっておりますが、研究、教育、学内業務を一

歩一歩進めて参りたいと思います。ご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

言語情報科学講座 講師

山田 彬堯

不安定な研究職を志し大学院へ進むことを、親や親戚、そしてなにより自分自身に許してもらうために取り始めた教職科目の中に「教師論」という講座がありました。熱もあり、笑いもあり、講義の内容自体とても面白い授業だったのですが、何気ない雑談の中に、とりわけ印象に残っている言葉があります。

「君たちは、これまでの人生で何十人という先生に出会ってきたでしょう。嫌な先生、腹が立った先生もたくさんいたでしょう。その中で、こういう先生になりたいという先生が一人でもいますか？...こう聞かれて『います』と答えられるひとはとても幸せです」

自分の博士論文の **defense** は 2019 年の 5 月 1 日、日本で年号が平成から令和へと変わった最初の日に行われました。生を受けたのもまた昭和から平成に元号の変わった 1989 年で、自分にとって平成はちょうど学生生活を終える過程そのものでした。そしてこの 30 年は、小学校に入るまでの 6 年、小学校 6 年、都内の中高一貫校に通った 6 年、学部から修士課程まで東大駒場に在籍した 6 年、ジョージタウン大学の博士課程（とギャップターム）の 6 年と、6 年ごとに区切られ、大変幸運なことにどの 6 年間にも出会えてよかったと思える先生方に何人も巡り会いました。

この方々の中で、最も自分の人生に影響を与えた「教師」は、祖父でした。ペンキ屋の長男として生まれ 10 代までは家業を手伝っていたそうですが、とても数学が得意なひとで、小学校高学年になった算数のできない私を憂いだ母に頼まれたことをきっかけに、私の先生になりました。

とは言っても説明が分かりやすかったような覚えもありませんし、一生懸命考えている横でさっさと勝手に答えを出していて、挙句「何でこれが分からないの」という顔で私を眺めていることに、何度も積然としない気持ちにさせられました。どうでもいいところに細かくて、ちゃんとしていてほしいところではいい加減で、皮肉が多くて、気分屋で、我儘で、頑固で、偏屈で、書くと文句はなかなか尽きないのですが、ただ、孫には真摯に向き合い、たくさん自分と喧嘩をしてくれました。後に認知症を発症してしまい、覚えられることや理解できることがほんの僅かなことがらに限定されてしまうのですが、大学に受かったときも、大学院での留学を決めた時も、誰よりも支援してくれて、誰よりも喜んでくれたのもまた祖父でした。

この祖父の生まれが大阪だったことから、阪大そしてこの大阪という街にとっても親しみ

を感じています。来年度より「言語統計学」という講座を持たせていただきます。祖父ほど人情に溢れた先生になれるかはわかりません。出会えてよかった先生だという感想を持ってくれる生徒さんが現れるのは当分先のことでしょう。ですが、大阪出身の祖父に育ててもらった自分が、ここで数学を教えるという縁をありがたく思い、大学院という険しい道を歩く方々に僅かばかりながらも道案内ができればと思っています。

現代超域文化論講座 講師

渡辺 貴規子

2020年4月から言語文化研究科、現代超域文化論講座及びフランス語部会に所属し、お世話になっております。コロナ禍の中で慌ただしく着任し、嵐のような日々を過ごすうちに、早いものでもう一年が経とうとしています。

私は生まれも育ちも豊中市です。大学院修士の時、フランスのアミアンに留学した以外、ずっとこの場所で暮らしてきました。中学・高校は西宮市へ通学し、大学からは京都大学へ通いました。京大では文学部の仏文を卒業後、修士課程、博士後期課程は人間・環境学研究科に進学しました。博士号取得後は日本学術振興会特別研究員PDとして研究しつつ、京都大学国際高等教育院の非常勤講師として、全学共通科目のフランス語の授業を担当し、後輩たちを教える喜びも味わいました。

子どもの頃から、大阪大学は仰ぎ見ると同時に身近な存在でした。家族の車に乗せられ中央環状線を走る時、豊中キャンパス正門の立派な「大阪大学」の銘の彫られた石柱を車の窓から見つめたものです。亡き祖父が入院していたのも、私が厄介な親知らずを、歯学部の学生さんたちに見守られつつ抜いてもらったのも阪大病院です。何かと心強いこの場所に、家族と一緒にずっと住みたいと願っていた私にとり、大阪大学に就職できるなんて、本当に思いがけない幸福でした。

専門領域はフランス児童文学、日仏比較文学です。後者ではフランス文学・文化の日本児童文学における受容を中心に研究しています。「子ども」に関心が向いたのは、幼い頃の私にとって物語がいつも味方だったという記憶、そして大学入学以降、教職課程や司書養成課程で教育学部の授業を受講し、教育と文学の関係に興味を抱いたことも大きいです。大学院時代に研究対象としたフランス児童文学作品、エクトール・マロ『家なき子』も、子どもの未来を真剣に考えたマロの教育観が詰まった作品であり、児童の権利の問題など、現代にも通じるテーマも見出されます。今後は彼の作品以外にも視野を広げ、日仏の児童文学について研究を続けていきたいです。

昨年4月からの手探りのオンライン授業が何とか成立したのは、先輩の先生方のご助言あってのことなのは言うまでもありませんが、Zoomでの授業を通して見える、大阪大学の学生さんの真面目さ、若者らしさ、優しさも大きな支えとなりました。全員が課題提出を怠らない優秀なクラス、出席コメントに「先生、今起きました！」と書きながらも無遅刻で参

加される学生さん、阪大名物「天津麻婆丼」やキャンパスのお気に入りの場所を教えてくれた学生さん、少しだけ心の通うやり取りに、不安でいっぱいだった私の気持ちも和らぎ、私も頑張らなくては！という気持ちになりました。今後はもっと学生さんたちに会える機会が増えてほしいです。

これからも言語文化研究科での教育と研究に少しでも貢献できるように精一杯努めてまいります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。